

第4節 専門学校におけるデザイン分野の歴史

平 田 真 一 (中国デザイン専門学校)

1. 研究の目的

専門学校はその成り立ちにおいて様々なパターンがあるけれども、それぞれの専門分野を限定してみると成立した過程には一定のパターンが見られる。本稿ではデザイン分野の専門学校を中心に専門学校の発生過程と発展過程を探るものであり、これまでどのような変化を行ってきたかを明らかにする。

現在の専門学校は8分野に分類されているが、それ以外にも専門性や目的によって分類することや、国家資格や様々な資格を習得するための専門学校を分類することも有効である。逆に取得目的としての国家資格など無く、技術や技能の習得を目的とする専門学校も存在する。その中でも、デザイン分野の専門学校は内容や生い立ちにおいて、他の分野の専門学校とははっきり分けることが可能である。この様な分類方法によって専門学校を詳しく分析することも我が国の職業教育の成り立ちを理解することも出来る。

デザイン分野の専門学校は分野別では文化教養分野に分類され、いわゆる「その他」の扱いとなっている。これは各種学校時代からの分野統計に寄る所が大きく、当時としては分野として認められるほど大きな勢力ではなかったことを示している。デザインという言葉自体、漢字に当てはめられていないことからみても、比較的新しい言葉であり、昭和30年代になるまで社会的に認知された言葉ではなかった。戦前には「意匠」という言葉が当てられていたが認知度は低く、結局「デザイン」という外来語で認知されたようである。

このことから、デザイン分野の専門学校がどのような過程を経て今日に至ったかを検証することにより、同時に専門学校の歴史の中で如何に社会変動に対する対応がなされてきたかについても検証をするものである。

これらの内容を精査することによって、職業教育が如何に社会に対応する必要があるかを明確にしてみたい。

2. 専門学校の歴史

終戦直後の各種学校時代において大きく発展したのは洋裁学校である。そのルーツは大正時代から続いていたものであるが、戦後の大きな社会変化によって新たな社会的ニーズが高まり、その結果多くの洋裁学校が設立された。我が国で古くから有名であった洋裁学校としては、1926年創設のドレスメーカー女学院（現学校法人杉野学園 ドレスメーカー学院）⁽¹⁾、1923年創設の文化裁縫女学校（現文化服装学院）⁽²⁾が上げられる。これ以外にも和裁学校や洋裁教室等はかつて多数存在しており、終戦直後に雨後の竹の子のごとく成長していった。しかしながら、それらの学校で現在まで存続しているところは少ない。昭和20年代に急速に拡大した洋裁学校は、昭和30

年代を境に急速に減少していった。洋裁学校の衰退と共に台頭してきたのがデザイン分野の専門学校である。

デザイン分野専門学校は戦後の経済復興とともに発展してきている。初期に「デザイン」という言葉を付けて学校を創設したのは、東京オリンピック前後の第1次デザインブームといわれる時代である（当時はデザインスクールと呼んだ）。我が国は第2次世界大戦において国土は荒廃し、産業も立ち直るまでにはかなりの時間を要した。戦後から15年を要してようやく経済は回復し、当時の新聞における流行語では、「もはや戦後ではない」や「好景気」であろう。その経済復興とともに国民所得は増加を続け、その後の大量消費社会へと繋がっていくこととなった。そのなかで、工業生産される商品への付加価値としてのデザインや様々な商品のデザイン制作がようやく社会に認知されることとなった。これは当時の松下電気社長松下幸之助氏の言葉「これからはデザインの時代やで」（1951）に代表される⁽³⁾。

3. 大学や高等学校のデザイン教育

我が国では実のところ、大正時代からデザインの必要性は理解されていて、大正時代に官立の工芸学校が設立されていた。第一次大戦後の世界では、ドイツのバウハウスが設立される時代であり、先進国では宣伝広告分野に結びつくデザインが産業として必要になってきたことを感じ取っていた。

当時はデザインに対する訳語として、意匠学科、図案科、などの学科が作られてはいたが、一般的になじみは少なく、戦後の混乱期に消えてしまうこととなった。

歴史的にいくつか例を上げると、旧東京工業専門学校（現千葉大学工学部）は第一次世界大戦後の高等教育機関増設政策により官立高等工業学校の一つとして東京高等工芸学校として設立され、1914年に廃止された東京高等工業学校工業図案科を継承する、工業学校と美術学校との境界領域（産業デザイン）の専門学校として設立されており、工芸を中心とした旧専門学校としては、京都高等工芸学校（1902年設立：現京都工芸繊維大学）に続くものである。創立時は本科（修業年限3年）に工芸図案科・同工芸彫刻部・金属工芸科・木材工芸科・印刷工芸科を設置した。

私学では1929（昭和4）年帝国美術学校開校（日本画科、西洋画科、工芸図案科：現武蔵野美術大学、1935年：多摩帝国美術学校分離：現多摩美術大学）があり、戦後武蔵野美術学校となり1954年にデザイン科という名称を用いている。また多摩美術大学も1947年多摩造形芸術専門学校を経て、1953年大学を設立している。美術大学は数多くあるけれども、この2校以外にデザイン教育を行う大学はまだ少ない時代が続く。（参考：1964年大阪芸術大学、1966年東京造形大学）

このように、大学では1950年代にようやくデザイン関連の学科が作られてはいたが、社会の要請に応える技術者の養成は新制の高等学校に引き継がれるところが大半であり、大学のデザイン教育は特殊な分野に向かってしまった。

高等学校では、各地で地場産業を支える人材育成が行われていた。例えば岡山では、岡山工業高校にて美術工芸科が1951年設立され建築科とともに地元人材の育成に当たっており、後にデザイン科となり印刷関連の人材を育成していた。ここからしばらくの期間は職業高校が地方のデザ

イン教育を担うこととなり、名称もデザイン科や商業デザイン科を用いることが多い。

1980年代頃までは、職業高校の卒業生が地方の産業界に人材を提供していたことは確かである。その後、何らかの理由にて、人材供給が止まり、高等学校卒業生の進路は進学へ向かって増加していった。

4. デザイン分野専門学校の歴史

ここではデザイン分野における専門学校（当時の各種学校）の発展過程を検証するために大きく4期に分けて検討を加えるものである。

4.1 昭和40年以前

第1次デザインブームまでの創成期

1956年に「もはや戦後ではない」という言葉が流行語となり、戦後の経済復興が本格的になってきた⁽⁴⁾。この社会復興の中で産業界の発展と共に新たな技術が導入され、それに伴う人材育成が必要となってきた。例を挙げると、オフセット印刷の普及である⁽⁵⁾。写真製版によるオフセット印刷はそれまでの写真や図柄の印刷に大きな変化をもたらし、印刷のための技術者レベルが高度な内容を要求されたため、新たな技術者教育と仕事が増加していった。

この時代にデザインスクールの基礎としていくつかの学校が開校している。

1954年に桑沢デザイン研究所、1955年御茶の水美術学院、1958年日本デザインスクール（現日本デザイン専門学校）などが開校しており、当時はデザインの専門課程（高校卒以上2年制の各種学校）として開校した学校が多いが、短期養成の学科や夜間の学科も存在しており、社会的に技術者の養成が急務であったことがうかがわれる⁽⁶⁾。

4.2 昭和40年代

(1) 1964年東京オリンピック以降1970年万国博覧会までのデザインブーム

我が国の高度経済成長期に大きなデザインブームが到来した。産業の発展は大量工場生産品を生み出しては来たけれども、それを大量消費に結びつけるために数多くの仕事を巻き込むことと成った。デザイン分野に多くの仕事及要求されることになった。

例えば、パンフレットやカタログを制作するグラフィックデザイン、工業生産品の形や色を決める工業デザイン、店舗や室内装飾を決めるインテリアデザインなどの仕事が増し、多くの人材が要求されてきた。この要求に対応して全国にデザインスクールが設立されていった。

東京では1961年東洋美術学校、1963年東京デザイナー学院、1966年東京デザインアカデミー（現東京デザイン専門学校）などが設立され、東京以外では1965年総合デザイナー学院（現大阪総合デザイン専門学校）、1965年北海道美術学校（現北海道芸術デザイン専門学校）、1966年仙台デザインスクール（現仙台デザイン専門学校）、1966年岡山の平田デザインスクール（現中国デザイン専門学校）など多くのデザインの学校が設立され現在も多くの学校が存続している。

(2) デザインの仕事

この時代のデザイン関連の仕事での特徴には次のような物が上げられる。

- カラーテレビの普及による色彩感覚の変化
- デザインによる付加価値の創造
- 大量消費に向けてのマスコミ広告の変化
- デザイナーと制作者の分業

これらの要求により、デザインスクールの教科内容は大きく変わり、次々と新しいカリキュラムが導入されることと成った。企業側の要求は更に拡大し、それに対応できるように新たな機材が導入され、複雑化した専門職は更に分業されていった。

カラーテレビの普及は消費者に色彩感覚を目覚めさせ、テレビの番組やコマーシャルはそれまでの画面と音楽の組み合わせに、色彩感覚を加える必要が生じてきた。消費者の目を引く色彩も要求され、ただ派手な色ではなく色彩のマトリックスによる構成された色使いが要求されてきた。ここで色彩学や色彩構成も必要となってきた。

デザインによる付加価値の創造では、外国のまねではなく、オリジナルなデザインが要求され、屋内、輸出共に耐えられる商品が要求されるようになってきた。ここでは従来のデザイナーよりも若手のデザイナーが登用される機会が増加していった。

そして大量消費に向けてのマスコミ広告の変化により新聞やテレビの広告やコマーシャルに多くの費用が投入され、新たな手法による制作が果てしなく続くことと成った。ここでも既存の物より新たな作品が求められ、若手登用の機会も増加することと成った。

複雑化した制作過程はデザイナーと制作者の分業を促進し、デザイナーのアイデアを使用に耐える作品へと変換する下請けの制作者が大量に必要となった。そのためデザインを習ったばかりの新卒者に対する求人は増加する一途であった。

このように就職先企業やデザイン事務所には多くの仕事があり、慢性的な人手不足ではあったけれども、仕事に採用されるためには一定レベルの能力が要求され、それに達しない物は学歴に関係なく、職に就けることはできない厳しい世界でもあった。

デザイン分野専門学校での学科では、当初は商業デザイン（後のグラフィックデザイン）や工業デザイン、室内デザイン（後のインテリアデザイン）などが作られていた。もちろん我が国ではデザインといえば服飾デザインが当然のことと考えられていた時代でもあり、これらのデザイン分野の専門学校はファッションと一線を画していた学校がほとんどであるので、両立していた学校の話はここでは省くことにする。

(3) 高度経済成長と万国博覧会の影響

大阪万国博覧会の前後に第2次デザインブームが到来し、高度経済成長に伴い大量消費社会によって、付加価値を高めるデザインの価値が社会的に認められるようになり、また社会が豊になり高所得が進学率を高めると共に、いわゆるデザインスクールにも反映することとなった。

この時代には東京や大阪などの大都会に大規模なデザインスクールが出来、さらに拡大して各地に分校を造るチェーン店的経営も出現してきた。この代表的な学校が、日本デザイナー学院や東京デザイナー学院である。

このような大規模校が出現することにより学科構成はさらに多様化の道を歩む。それまで専攻であったものが学科名になることで、多くの学科名が造られていった。商業デザイン科からは、グラフィックデザイン、写真デザイン、パッケージデザイン、挿絵、絵本などの専攻が学科名に変わっていき、工業デザイン科からは、家具デザイン、プロダクトデザイン、クラフトなどの学科が造られてきた。

4.3 専門学校前期

1977年に専修学校制度が新設されるとこれまでのデザインスクールはほとんどが専門学校となり、名称もデザイン専門学校を名乗るところがほとんどであった。しかし内容的にはほとんどかわることなく、それまでの各種学校時代と同様のカリキュラムで教えていたに過ぎない。当時は各種学校が衰退の一途であり、高校卒の進学者は短期大学進学に移って行ったために、これまでのように進学率の増加による学生増加の恩恵を受けることが少なくなってきた。

この時期に生き残りをかけて新たな模索を行った学校が新しい学科を生み出すこととなる。またそれまでの歴史から美術分野の学科を開設していた学校もいくつか存在していたが、この時代に純粋な美術教育から脱却し、職業教育としての美術教育へ転換した学校も多く見られる。具体的には、美術科をアートやイラストレーションの学科に変換し、クライアントの要求による商業美術の作品を制作する学科に変えていった。

都会の専門学校では地方からの入学生が増え、地方の学校との差がさらに開くこととなった。デザイン分野での競合する大学は少なく、将来のデザイナーを目指す若者が都会に集中していった。その反動で、地方の専門学校はしばらく不遇の時代を送ることとなり、廃校や身売りを余儀なくされる学校も出てきた。

4.4 専門学校中期

1980年代になると第2次ベビーブームが到来し、大学、短大が狭き門となりあふれた学生が専門学校に入学するようになった。もちろんその多くは当時新興のビジネス系の専門学校に流れるのであるが、デザイン分野専門学校も少しずつ学生数は増加していった。この頃になると我が国の経済は絶頂期を迎え、いわゆるバブル経済崩壊の前夜までの豊かな消費社会であった。社会が豊かになると人々の意識は多様な価値に分散され、それまでは価値を認められなかったものや全く新しいものに価値を見いだすようになった。

デザイン分野専門学校もこの多様化した要求に応えるように新たな学科を構成していった。この流れは、それまでの就職先等の需要によって構成されていた学科から、就職先ではなく学生が求めてきた新たな学科を構成するまでになった。また、これまで一部の人しか知られていないマイナーな分野の学科も造られていった。

これらを代表するものが、マンガ、アニメの学科である。マンガは戦後いち早く我が国の文化を形成した大きな産業であるにもかかわらず、学校教育に認められないものであり、それまでは学科として立ち上げることが少なく、他の学科に含まれているものであった。アニメも同様に需要は多いにもかかわらず、産業界の構造からあまり表に出ることなく、ひっそりと奥の方で存在

を続けていた分野である。

このアニメ、マンガの仕事は現在まで日本の文化を代表する輸出産業にまで拡大したにもかかわらず、教育の分野では「マンガを見ると勉強しなくなる」と言われ続け、教育とは相反するものとなっていた。実際、マンガが好きな若者のほとんどが「マンガは隠れてみていた」と言うほどであり、サブカルチャーとして社会の背面にて発展した分野でもあった。現在でも全国的にアニメ・マンガ分野の学科は根強い物があり、都会や地方の学校の差はなく一定量の希望者を確保している。

以上のような過程を経てデザイン分野専門学校は変化を遂げてきた。さらに変化の原因となったのが、コンピュータの普及による産業構造の変化である。これにより、教育内容は大きく変わる事となった。

5. コンピュータ導入による大きな変化

1990年代になり、コンピュータ導入が進むとデザイン分野専門学校にも変化が生じてきた。10年程度以前からコンピュータグラフィックス（CG）と呼ばれる大型の機械を用いた画像処理技術は導入されていたけれども、かなり高価な設備であり、全ての学校が購入できる物でもなく、専門学校では購入したとしても学生が自由に使える物ではなかった。そのため、専門の学科を作ったところもあるが、あまり多くは存在していなかった。

ところがパーソナルコンピュータが普及し値段が安くなることにより、またインフラが整備されることによって急速に取り込まれていき、学科構成に大きな影響を及ぼす事となった。特にデザイン分野では Apple 社のマッキントッシュコンピュータ（通称マック）によるところが大きい。この UNIX から派生した OS を持つマックは当時主流の OS（MS-DOS）と異なり汎用コンピュータと互換性があったことから、印刷関連のシステムに取り込まれることとなり、印刷の世界では欠くことの出来ない物へと変化したため、グラフィックデザインの分野では必須のものとなった。実際現在では、Adobe 社のイラストレーターとフォトショップが使いこなせれば、かつて数人掛かりで行っていた印刷製版行程を一人で短時間にて処理することが出来るためにこの技術を習得すれば、就職することはたやすい状況である。

デザイン分野専門学校にこのマックが導入されてからは、授業内容と教員関係に大きな変化をもたらす事になった。それまでの作品制作は筆や絵の具で実際に描くことが主体であったが、これらの作業は基礎教育の分野だけに残り、作品制作はマックの中で作られる物が主体となった。他の分野でも多少の遅れはあるけれども、進級や卒業のための作品制作のためにコンピュータを用いることが当たり前になり、それまでの細かい筆遣い等の個人的な技術差を能力として評価されることは無くなってきた。

その結果、専門学校において習得する技術は、細かい手で書く作業から、全体的な構成やレイアウトを考える能力の評価へと変わっていった。同時に教員の能力やスキルも同様に、マックが使えることが当たり前となり、コンピュータになじめない古株の教員が去っていった学校もある。もちろん、過去の栄光にとらわれて旧来のアナログ中心の授業内容の学校もあったけれども、結

局自然淘汰されてしまった。

この時期の社会的変化に対応できたか否かにより、デザイン分野専門学校の生き残りに大きな影響を及ぼすこととなった。専門学校だけでなく、同種の教育を行っていた高等学校のデザイン科や短期大学のデザイン科も同じ影響を受けることとなり、対応できない学校も数多くあり、同じデザイン科を名乗りながら内容の分かれる学校が多数存在したけれども、これらの学校も結局自然淘汰されてしまった。

6. デザイン分野専門学校の現在

専門学校制度も制度制定後30年以上となり、制度と現状や社会的要求等などの変化に対応できなくなってきたことは確かである。また、専門学校の分野の内容も大きな変化を受けており、少子化に伴う進学者の低下はこれまで競合の中で入学者を確保して来ていたビジネス分野の専門学校に大きな減少という打撃が生まれることとなった。逆に、高齢化社会に伴う医療や社会福祉の充実政策により医療福祉分野の専門学校が増加することとなった。専門学校の中には募集が芳しくない分野をあきらめて医療福祉の分野など学生の集まる分野の学科を新設する学校もあり、生き残りをかけて再編成が進んでいる。

これとは別に、デザイン分野専門学校は新たな分野を新設することなく以前からのデザインにて存続しているところが多い。これにはいくつかの理由が考えられる。

- デザインの技術を習得して就職するためには一定の技術が必要であること。
- その技術の習得には実技と応用能力が必要なこと。
- さらに、繰り返しの訓練が必要なこと。

これらを学校で教えるためには、熟練した教員や社会で実際に仕事をした経験のある者でないと効果がなく、書物を読んで知識を得るだけでは役に立たない。つまり、これまで何十年もデザイン教育を続けてきた学校には容易いことであっても、新設する者には困難な分野である。ほとんどの学校が企業業界から教員を補充しており、その多くがその学校の卒業生であることが多く、長年の試行錯誤の中で、独自のシステムを構築している。また、コンピュータグラフィックスの分野では工業系のコンピュータ関連学科と競合しているけれども、工業系学科の目的はプログラマー養成であり、クリエイティブな作品を求めるデザイン分野とは一線を画しており、キャラクターなどオリジナルな作品の制作に重点を置いている点で区別されている。さらにインターネットの普及により、Web上でのコンテンツ（画像）制作の分野が活発になり、工業系との競合はさらに複雑化してきている。

デザイン分野は他の学校から見ると容易く参入できるように見えるために、これまでも学生が集まらなくなったビジネス系の専門学校などから参入した例は幾つもあるけれども、授業内容と学生就職先での要望に対する学校のコンセプトを誤ると結局失敗してしまう。そのため、現在でもデザイン分野専門学校数は多くはないし、少なくともなっていない。

現在のデザイン分野専門学校の持つ諸問題には次のようなものが上げられる。

1. 大規模チェーン校の衰退

2. リニューアルの戦い
3. 都会型と地方型の特徴
4. 他の学校種との競合

1980年代に見られたような大規模な全国展開を行っていたデザイン分野専門学校はほとんど無くなってきており、現在は少数のグループしか存続してはいない。その代わりに、東京や大阪の専門学校においても、学生の確保にかなり努力しており、大グループの有名度よりも、それぞれの専門学校の特徴をはっきりアピールすることによって学生を確保している状況である。そのために、全ての専門学校が常に内容のリニューアルを続けている。もちろん、どこかの専門学校が新しい学科を作るとすぐに他の学校に判ってしまうので、如何に早く特徴付けを行うかが勝負の分かれ目でもある。

都会型の専門学校と地方型の専門学校では、就職先企業において大きな差があるために、これまであまり競合することは無かったけれども、最近では地方の学生が出身地での就職を希望するために、都会型の専門学校も就職先の開拓のために、地方の学校と競合せざるを得なくなっている。

最後に、地元で就職を希望する学生が増えたことは、大学の卒業生においても同様のことが言えるために、地方のデザイン関連の仕事を様々な学校種の学生が取り合うこととなってきた。デザイン分野の能力や実力をはっきりアピールすることは大変難しいために、それをはっきり示す技術、例えばプレゼンテーション技術、も授業の中に要求されてきている。

7. おわりに

これまで述べてきたように、我が国の戦後の高度経済成長まではデザイン分野の人材教育は大学、職業高等学校、専門学校などで棲み分けがされていてそれぞれの立場でもデザイン教育がなされていたけれども、1990年代を境に急速に変化していった。第一の理由はコンピュータ導入による仕事の高度化よるところが大きい。第二の理由は社会が豊かになったための進学率の上昇であろう。いずれにしても、この時期に社会的要求と人材育成との間に乖離が始まることとなった。

この乖離をデザイン分野専門学校が埋めていったと考えられる。現在ではこれまで述べてきたようにデザインの実力を持つ者はどのような学校種で学ぼうとも就職の機会には恵まれているので、本来なら学校間の格差は生じないはずであるけれども、学校の目的が社会の要求から外れてしまうと、企業が要求する高度な技術内容を身につける教育を行うことが如何に困難であるかを明確に示すことともなった。

〈注〉

- (1) 1926年 ドレスメーカー女学院 <http://www.sugino.ac.jp/gakuen/>
- (2) 1923年 文化裁縫女学校 <http://www.bunka-fc.ac.jp/index.html>
- (3) 和田, 大谷, 「デザインに対する松下幸之助の経営的先見性について: 企業内デザイン部門黎明期の研究 (1)」 デザイン学研究 51 (5), 37-46, 日本デザイン学会, 2005

- (4) 1956年、経済企画庁は経済白書「日本経済の成長と近代化」の結びで「もはや戦後ではない」と記述
- (5) オフセット印刷機は戦前から存在していたが、普及したのは1954年以降、印刷機及び印刷会社の発展による。<http://www.waterless.jp/waterless/history.php>
- (6) 開設年は各学校が実際学生を募集して本格的に開設した年度を採用している。(以下同じ)